

5. 認知症高齢者のBPSD (behavioral and psychological symptoms of dementia ; 行動心理学的症候) に対するイメージについて —看護学部3・4年生の比較検討から—

○炭多雄人 (舞子台病院), 大久保幸子 (加古川市民病院), 河村沙織 (福岡和白病院)
妹尾眞梨菜 (日ノ本学園高等学校), 鈴木千絵子 (関西福祉大学看護学部)

I. はじめに

近年、認知症の行動心理学的症候 (以下 BPSD とする) は、個別性が高く看護師や介護士でさえ困難感を抱く要因になっている。千葉ら (2006) は、認知症高齢者との関わりで看護学生が対応困難となる場面の特性と BPSD の発現場面が重なるとしている。また、井上ら (2013) は、認知症高齢者の症状をイメージすることの重要性を報告した。そこで今回、看護学部 3・4 年生での認知症高齢者の BPSD に対するイメージと知識や興味との関連について検討したので報告する。

II. 研究方法

1. 対象者: K 大学看護学部 に在籍する 3 年生 103 名、4 年生 89 名の合計 192 名。
2. データ収集・分析方法: 質問紙を用いたアンケート調査を行った。記述統計、マンホイットニー検定、 χ^2 検定を使用した。学年別で BPSD のイメージ、知識、認知症高齢者についての興味の程度を比較した。統計ソフトは SPSS20.0 for windows を使用した。
3. 倫理的配慮: 対象者には、研究目的と内容を文書と口頭で説明し、研究への参加は任意であり、参加・不参加による不利益が生じないことを伝えた。本研究は、平成 27 年度 関西福祉大学倫理審査委員会の承認を受けて実施した。

III. 結果

回収数は、3 年生 76 名 (回収率 73.8%)、4 年生 66 名 (回収率 74.2%) の 142 名。BPSD に対するイメージの平均得点は、3 年生 26.7 ± 5.2 点、4 年生 27.4 ± 5.3 点 ($P=0.653$)、項目別で最も「イメージできない」のは、3 年生は弄便について、4 年生は幻覚および異食についてであった。両学年とも最も「イメージできる」と答えた具体例は、「10. 大声で叫んだり、わめいたりする」(3 年生 53.9% 4 年生 60.6%) であり、次いで、『5. 「〇〇が盗んだ」と責める、もの盗られ妄想があることがある』(3 年生 51.3% 4 年生 53.0%) であった。学年別における BPSD に対する知識・興味については、知識は 4 年生が 3 年生に比べ有意に高く ($P<0.01$)、興味は両学年とも 8 割近くが「あり」だった。BPSD に対するイメージと知識について、イメージが平均得点以上 (28~36 点) でかつ知識得点も平均得点以上だったのは、3 年生は 12 人 (15.8%)、4 年生は 25 人 (37.9%) であった。BPSD に対するイメージが平均得点以上でかつ「興味あり」の人は、3 年生は 31 人 (86%)、4 年生は 25 人 (78%) であった。

IV. 結論

BPSD イメージは学年で差があった。両学年ともイメージ出来ている人に「興味あり」の人が多く、4 年生は 3 年生に比べてイメージ出来ている人の中に知識のある人の割合が多かった。このことから、BPSD のイメージを高めることで興味や知識獲得にもつながるとともに、実習することによって、これらのイメージと知識のつながりが強化される可能性のあることが示唆された。